

経済・金融 フラッシュ

中国GDP発表:

景気は好調持続、インフレ懸念は遠退くも注意信号は継続

経済調査部門 主任研究員 三尾 幸吉郎

TEL:03-3512-1834 E-mail: mio@nli-research.co.jp

1. 景気は好調を持続

4月15日、中国国家统计局は2010年第1四半期（1-3月期）の実質GDP成長率が前年同期比11.9%増になったと発表した。2009年第1四半期の6.2%増を底としてV字回復した中国経済は、これで2四半期連続の10%超の実質成長となり、前年の水準が低かったことが成長率を押し上げた面もあるが、中国経済の好調持続が再確認できたと言えるだろう（図表-1）。

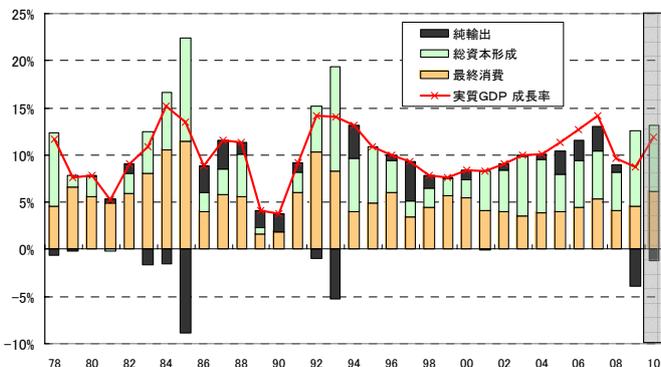
（図表-1）



この第1四半期に11.9%成長となった要因を需要項目別に見ると（図表-2、3）、最大の牽引役は引き続き総資本形成となった。寄与度は6.9%ポイントで、過去平均（2002-2009年）と比べると高いが4兆元の公共投資等を受けて急拡大した昨年通期の8%ポイントと比べると若干寄与度が低下した。逆に最終消費は、昨年同時期に低迷した反動もあり4.6%ポイントから6.2%ポイントへと寄与度を高めた。一方、貿易の大幅減少を受けて昨年通期3.9%の大幅なマ이너寄与となった純輸出は、今年第1四半期は輸出・輸入ともに大幅増加となったものの、国内景気の好調等から輸入が輸出を上回る勢いで増加したことから貿易収支は改善せず、前年に続き1.2%ポイントのマ이너寄与となった。

（図表-2）

中国の実質GDP推移(需要別)



(資料) 中国国家统计局、CEIC
(注) 2010年度は2010年3月末時点

【需要項目別寄与度】

	実質GDP成長率 (内訳は寄与度)			
	最終消費	総資本形成	純輸出	
2002年	9.1%	4.0%	4.4%	0.7%
2003年	10.0%	3.5%	6.4%	0.1%
2004年	10.1%	3.9%	5.6%	0.6%
2005年	10.4%	4.0%	3.9%	2.5%
2006年	11.6%	4.5%	4.9%	2.2%
2007年	13.0%	5.3%	5.1%	2.6%
2008年	9.0%	4.1%	4.1%	0.8%
2009年	8.7%	4.6%	8.0%	-3.9%
2010年1Q	11.9%	6.2%	6.9%	-1.2%
過去平均 (02-09年)	10.4%	4.5%	5.5%	0.5%

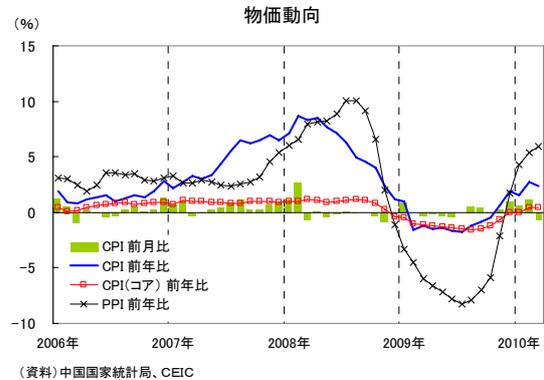
2. インフレ懸念は遠退くも注意信号は継続

一方、同時に発表された3月の消費者物価指数（CPI）は前年同期比2.4%上昇と、2月の同2.7%上昇から上昇率が鈍化した。

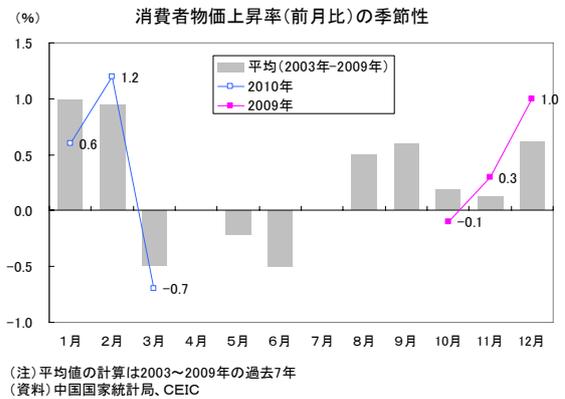
図表-4 に示した消費者物価上昇率の季節性を見ると、昨年11月、12月には2ヵ月連続で過去平均を上回りインフレの加速が懸念されたが、今年1～3月はほぼ過去平均並みの推移となり、特に3月は0.7%の下落と過去平均を下回ったため、インフレ懸念は一旦遠退いたと言える。

しかし、インフレ懸念は遠退いただけで、8～9%程度と見られる潜在成長率を上回る経済成長を続ければ、夏場にかけてインフレ懸念が再燃する可能性が高いと見られる。図表-3 に示した工業品出荷価格指数（PPI）は、原油価格等の上昇から3月も前年同月比5.91%上昇（前月比0.54%上昇）と上昇傾向を続け、消費者物価上昇率も食品とエネルギーを除いたコア部分は依然として上昇傾向にある。引続き、消費者物価動向からは目が離せない状況が続くだろう。

(図表-3)



(図表-4)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。